

真っ赤な実——糖葫蘆礼賛

ある時、外出から帰った義父が、ゴソゴソと鞆から取り出したのは、袋入りの干し山査子^{さんざし}だった。「こんなの売っていたんだ。珍しいねえ、日本ではじめて見つけたよ、食べてごらん、な、うまいだろ、この甘酸っぱいのがいいんだよ。甘いだけじゃあだめなんだ、酸っぱいとね、味がピット締まるんだ」とご満悦で、それ以来、外出先で見つけたと言っては、「はい、あんたたちの分」と私たち夫婦にも買ってきてくれた。しばらくの間、父の机上のボンボン入れやリビングのテーブルの上など、干し山査子は切らすことなく置かれ、父は通りがかりにそれをポイと口に入れては、「甘酸っぱい、甘酸っぱい」と言って、嬉しそうに笑った。

義父、赤羽末吉は、一九三二年、二十二歳の時、単身、旧満州（現中国東北部）大連に渡り、日本敗戦の二年後に帰国するまでの十五年間を大陸の地で暮らした。大連に嫁いだ姉の紹介で運送会社に就職した赤羽は、しばらくして、大連港を通関する荷の脱税という「大仕事」を任された。緻密な計画の末、その仕事をみごと成し遂げ、なんと、依頼主である満州電信電話株式会社にスカウトされた。思いもかけず、旧満州の通信と放送を一手に担う大会社のエリートサラリーマンとなって、本社のある満州国の首都、新京（現長春）へと家族を伴い赴いたのだ。新京では、勤めの傍ら画家としての頭角をあらわし、満洲国で一番権威のあった満洲国美術展覧会で三回にわたり特選賞を受賞すると、日本画家として認められるようになった。さらに、新聞や雑誌に、満州各地の旅行記や大連時代から夢中になっていた中国影絵人形芝居、そして泥人形などの郷土玩具について、多くの記事を書く機会に恵まれ、郷土研究者としても名を馳せていった。広報担当として働いていた勤務先でも、日本画家や郷土研究者としての業績が認められて、比較的自由に活動できるようになった、そこで、赤羽は、新京の中国人街を歩きまわり、頻繁に出かけた旅先で目を凝らし、土地の匂い嗅ぎ、風景、風物、建築、食べ物など、大陸の自然と中国文化のすべてにどんと心惹かれていった。 そのようにして出会ったものの一つが、糖葫蘆^{タンホウル}と呼ばれる山査子の実の飴菓子だった。義父がなぜ後年日本で見つけた干し山査子をあれほど喜んだのか、満洲当時、旅行雑誌に発表した一文を読むと、あの笑顔の訳がわかるのだ。

「糖葫蘆礼賛

赤羽末吉

日本語で云ふと山査子の實^みのだんごで、これにあめがけしてある。

この南満（筆者註・南満洲）に出来た眞赤^{まっか}な實^{かうりゃん}のだんごを、高粱^{かうりゃん}のつとに放斜状にビッシリと差したその美しさを、知らぬ人はさうあるまいと思ふ。あめが太陽にきらきらと光り、その下に並ぶやけつく様な赤の實の美しさは、満洲にはなくてはならぬローカルな街頭の花である。（中略）

山査子の實は。怖ろしく酸い。あめは御承知の様にゴツテリと甘い。この両極端が口の中で混然と解け合ったそのうまさには舌の奴めがやりきれんと許りに躍動するのである。こゝで終生切っても切れない因果関係を生ずるのである。（中略）

ポトポトとぼたん雪の降る元宵節の宵のことである。城内の薄暗い街頭のこゝかしこに糖葫蘆が、海の底の真珠の様に光るのである。私は帰りしな、何本かを求めると、馬車の上で楽しい元宵の街を思ひながら、ユックリと味はつた。」（「観光東亜」十一月号、一九四〇年）

*筆者註 元宵節とは春節（旧正月）から数えて十五日目にあたる、新年最初の満月の日。燈節とも呼ばれ、軒先や街にとりどりの燈籠を飾って祝う。

義父にとって干し山査子は糖葫蘆に繋がる旧満州の懐かしい味だったのである。私も中国の旅の途中、義父のこよなく愛した糖葫蘆を長春駅前の雑踏の中で見つけ、味わった。それはやはり、飛び切り甘く、飛び切り酸っぱい魅惑的な味だった。今風の自転車の糖葫蘆売りは、父の時代と変わらぬ太い藁束を穴をあけたブリキで覆い、そこに糖葫蘆を挿し並べている。天を射すような糖葫蘆の鮮烈な赤が、駅前といえども広々とした真っ青な大陸の空に照り輝いていた。

義父は、糖葫蘆の、その味わいだけでなく、燃えるような赤い色やキラキラとした輝きにも心ときめかせていたのだろう。糖葫蘆と同様に、旧満州各地で出会った「赤い色」について、当時の文章の中でいくつか記している。

異常色彩、熱河

例えば、熱河（現承德）の「赤」についての記述は次のようなものだ。

「熱河

赤羽末吉

熱河の美しさは先づ色彩と云へやう。その美しさは日本にも、又満洲のどこにもない異常色彩の美である。

ピンと張つたコバルトの空をはいして、連々と白く光る山々の要所々々にぽつんぽつんと巨大なラマ寺の豪華な色彩に燃える美しさ、大自然と人工とが混然と和した雄大華麗な美しさ、やはり夢の様などか、龍宮の様などか抽象的な形容をするより仕方のない偉大な構想の美しさである。(中略)

離宮の山がきれいと、白い光をガッシリうけて桃色の布達拉廟、^{べに}紅の行宮がせり上るのである。あゝ、なんと云ふ美しさ私は大地にベタベタと座り込むとぬけがらの様になつてこの夢の境地に浮遊したのである。」(掲載雑誌名、発行年月日不明、一九四〇年頃か)

当時熱河と呼ばれていた承德は中国河北省に位置し、現在は世界遺産となっている。西太后も一時暮らしという清の皇帝の夏の離宮、避暑山荘と広大な庭園は八つの山々に囲まれ、その山の一つ一つに外八廟と呼ばれるチベット仏教寺院が建立されている。赤羽はその廟の一つ、須弥福寿の廟にある瑠璃万寿塔の回廊で、大の字になって昼寝をした。すると、麓の部落から「トゥオーナー ファラア—」という豆腐屋の呼び声がモックモックと雲のようにあがって来たそうだ。当時赤羽は、この地の歴史性、強烈な色彩、そしてその雄大な景観の中で営まれる人々の日常の暮らし、そのすべてを描き込んだ、つまり回廊で感じた中国の悠久を日本画の大作として描きたいと強く願っていたようだ。

数年前、私は承德を訪れた。「紅の行宮がせり上がる」と父が評した海老茶がかつた赤一色の巨大な布達拉廟はじめ、巡った五つの廟はどれも強烈な赤を基調に、白、金、黄、青、緑といった極彩色で彩られ、まさに豪華な色彩世界であった。日本でこれを見たら興ざめしそうなほどの色の氾濫である。しかし、親指を突き立てた姿の巨岩が山の頂に突っ立っているような雄大な景観と、初夏の溢れる光の中ではその極彩の色の洪水がごく自然に受け止められてしまうのである。

このほかにも、まっ赤なひょうたんに目鼻を付けた眼医者看板、大きな赤い口のカエル型の灯籠、縁起物の桃やザクロなどがデザインされた細かい切り絵を施した春聯など、旧満州の暮らしの中で、赤羽末吉の目に留まり、心浮き立たせた「赤い色」は数多い。

『スーホの白い馬』の赤

赤羽末吉の代表作、絵本『スーホの白い馬』(大塚勇三・再話、福音館書店、一九六七年)の表紙には、地平線によって分かたれた、広々とした草原と夜空を背景に、白い仔馬をしっかりと抱いた、鮮やかな赤いコスチュームのスーホ少年が描かれている。このスーホのコスチュームの色もまた、義父、赤羽末吉が

大陸で見た赤い色なのだ。

一九四三年、三十三歳の時、赤羽は、新たに建立されるチンギス・ハーン廟の壁画を描くよう、満州国から委嘱を受け、内蒙古（現中国、内モンゴル自治区）に取材旅行に出かけた。

内モンゴルの旅のことを、父はよく夕飯の時に話してくれたものだ。

「三六〇度の地平線を見たことがあるかい。そりゃあ広いんだよ。あっちの空が曇っているだろ、こっちの空はピカピカに晴れていて、真っ青な青空。後を振り返ると、ザーッと猛烈なスコールでね。とにかく、天気全部いっぺんに見られるんだ。それくらい広い空でね。どこまでもずーっと見渡せる。地球の半分が見えるって感じだね。空がお椀をかぶせたような形でね、ほんとに覆いかぶさってくるんだよ。そんなの見たことないだろ。それでね、遠くに黒い犬が一匹、小さく点のように見えるんだけど、こっちに來るのか、向こうに行くのか、止まっているのかさっぱりわからないんでね、皆で当てようってことになって、ずーっと見つめていたんだけど、結局わからずじまい。犬が、たーだゆらゆらゆらゆら揺れるばかり。比べるものが何もないからね。なんたって広いんだ。でもねえ、食事といっちゃあ、來る日も來る日も來る日も羊の茹でたのばっかり。野菜も果物もなーんにもない。たーだただ羊」。

この忘れえぬ壮大な大地と空の感動を、子どもたちと分かち合いたい、島国で、ともすれば考えが縮こまりがちな日本の子どもたちに、こんなスケールの大きな天地があるのだということを知ってもらいたい、という思いから生まれたのが代表作『スーホの白い馬』なのである。

赤羽末吉は、自身のエッセー集、『絵本よもやま話』（改訂版、偕成社、一九八三年）の中で、『スーホの白い馬』を、「色のドラマ」と「構図のドラマ」によって組み立てたと述べている。赤羽は、この絵本を読む子どもたちが、地平線のどこまでも続く草原の広大さを感じとり、そこに暮らす人々の世界に。より深く入り込んで、スーホ少年と白馬の物語を自ら生きた体験とし、この悲しい物語が子どもの心を豊かにしてくれればと願っていたに違いない。そのために、草原と人々の暮らしを、文章だけでなく、絵によってもわかりやすく示し、絵本としては長編の物語の流れを理解しやすくするために、色と構図に工夫を凝らしたのだ。

赤羽は内モンゴルの旅で、草原の真ん中に建つチベット仏教寺院、貝子廟^{ベイズミャオ}を拠点に、大量の写真を撮り、スケッチをして帰った。貝子廟では、ちょうど、チャムと呼ばれる日本の節分を思わせる祭りの最中

で、沢山の参詣人が訪れていた。赤羽は、祭り自体よりも、草原に暮らす人々や、まわりの風景に興味を惹かれていたらしい。この内モンゴルの風景も、いつか日本画の大作として描きたいと思っていたのだろう。敗戦後、中国から引き揚げるとき、大量の内モンゴルの写真とスケッチを、禁を犯して命がけで日本へと持ち帰った。それら写真のうち一枚の裏に、「白い壁に赤い僧の衣が鬼女のように泳ぐ」と記されているものがある。義父の訪れた年は干ばつで、滞在した寺院の周辺も、青々とした草原というよりはむしろ、枯草に覆われた荒涼とした大地だった。その大地を行くチベット仏教の真っ赤な僧衣。

モンゴル民話『スーホの白い馬』の舞台である広大な大地、そこに住むスーホには、赤羽末吉自身が内モンゴルで実際に目にした僧衣と同じ、真っ赤なコスチュームが一番似合うと思ったのではないだろうか。写真の裏の、「白い壁に赤い僧の衣」という、白と赤の対比は、「スーホの白い馬」の表紙の中でも、白馬の白とスーホの赤、という対比をもって表されているようだ。

二〇一七年、私は義父の訪れた内モンゴル、シリントにある貝子廟とその周辺の草原に旅した。貝子廟は、大きな広場に面して、東西に三つの大寺院が並び、それぞれの寺院が僧房や事務所、堂などを有する巨大な寺院群だが、私の訪れた時には改修中で、実際に見学できたのは中央の最も大きな崇善寺のみだった。父の時代とほとんど変わらぬその建物の内部に足を踏み入ると、まずは、どっと並び立つ柱の鮮やかな赤い色が目にとびこんでくる。須弥壇も前卓もみな真っ赤だ。堂内には、鮮やかな黄色や青、白などの祈祷旗が飾られ、黄色の小座布団がおかれていた。これらの色も皆、義父が内モンゴルで見、心に刻んだ色に違いない。

義父、赤羽末吉は『絵本よもやま話』改訂版の中で、「赤い着物のスーホと、白い馬を見つめていれば、だれでもドラマのなかにどんどんはいつてゆけるようにした」と語っている。記憶の中で深く内モンゴルに繋がっていたスーホのコスチュームの赤は、絵本全体を通して重要な役割を担う赤なのである。

『スーホの白い馬』の第一場面には、画面一杯に架けられた大きな二重虹と、その下に広がる草原が描かれている。映画で言えば、物語が繰り広げられる舞台となる場所を示す遠景のカメラワークだが、そこにまだスーホの姿は見えない。

第二場面。^{パオ}包と呼ばれる組み立て式の家の前では、スーホの祖母が、天日に干そうとしているのだろうか、二枚の布を地面にひろげている。そういったいつもの暮らしの中で、いよいよ主人公スーホの登場

だ。物語の始まりを告げるように、画面の中央に、赤い上着のスーホを乗せた馬が歩き出す。読者はこのページから、赤い上着のスーホを、そして、第三場面からは、赤い上着のスーホと白馬を追って行けば、物語がわかってくるのである。赤羽は、スーホのコスチューム以外にも、絵本全体を通じて、時折、赤を差し色のように使っている。例えば、第五場面は、白馬が羊を守って狼と闘う場面だが、暗い背景に狼の目と口の中だけが赤い。狼の恐ろしさが目と口の赤色で強調され、危険を省みない白馬の、スーホへの愛情と献身をより強く感じさせてくれる。

第十一場面は王様がスーホを面罵する重要な場面だ。白い余白を広くとって、前面に大きく描かれた後ろ向きの王さまと家来。その向こうに、あえて小さく描かれた赤い上着のスーホが、白馬を連れて立っている。このような構図の取り方で、赤羽は、王様の横暴さ、憎々しさを子どもにもわかりやすく伝えようとした。「構図のドラマ」である。

後ろ姿の王さまの辮髪に結ばれた、房付きの細く赤い紐。家来の辮髪には、房のない小さな赤い輪だけがつけられている。王様の紐は長く、その房は椅子の背の中央にまで垂れさがっているのだが、その椅子の背には、メドゥーサのような恐ろしげで、いかにも邪悪な顔が描かれている。その青緑色の不気味な顔と、少し朱の入った妙に生々しい赤が相まって不穏な雰囲気のを漂わせ、後ろ姿で見えない王様の、ずるくて意地悪な、威張り腐って醜い顔を想像させる。

『スーホの白い馬』の終盤、悲劇が進むにつれ、スーホの悲しみや苦悩を表すように、上着の赤がほんの少しだけ濁った赤に変化してゆく。そして、白馬の死を迎える十九場面は、見開き全体を白がかった透き通った鼠色に塗り込め、スーホも白い馬も祖母も消え入るかと思うほどに色薄く描かれている。しかし、夢に白馬が現れ、自分の骨や皮や筋を使って馬頭琴を作るようにとスーホに告げる次の場面は、飛び切り明るく、スーホの赤い上着も軽やかな赤となっている。次の場面から、読者はスーホの赤い上着を再び追い続けるのだが、最後の場面は、夜空に二重虹がかかり、小さな白い包が一つ、ぽつんとたっているだけの草原だ。スーホも白馬もいない。物語はそこで静かに終わりを告げる。

『ほしになつたりゅうのきば』のサン

赤羽は、中国ミャオ族の民話、『ほしになつたりゅうのきば』改訂版（簫甘牛・採話、君島久子・再話、福音館書店、1976年）の主人公、サンにも真っ赤な上着を着せている。この絵本でも、読者は赤い上

着のサンを追って行けば物語がわかるようになっているのだ。と同時に、物語のスケールが大きく、俯瞰的に描かれるシーンが多いこの絵本の場面構成の中で、このくっきりとした赤がアクセントとなり、それぞれの場面を引き締める役割をも果たしているようだ。

表紙にも使われている、サンが龍の牙を抜く場面で、大きな赤い龍の首とサンの上着を共に赤くして赤を強調したのは、物語前半の山場として効果的で、次の場面からは、物語は徐々に、サンと姫が無事に天を繕う大団円へ向かって進んでいく。赤がより強烈なイメージを与えるのが、サン誕生の第二場面である。画面中央には、パッカと割れた石とその中の真っ赤な赤ん坊。石の上下には、明るい朱色が火のように燃え上がる。その構図と色合いは、あたかも出産と誕生を思わせ、壮大な物語の始まりにふさわしい迫力だ。

大陸の赤、日本の赤

ここでとりあげた『スーホの白い馬』や『ほしになつたりゅうのきば』の赤、同じく、中国ミャオ族の民話『あかりの花』（肖甘牛・採話、君島久子・再話、福音館書店、一九八五年）の華やかな赤、そして中国イ族の民話『王様と九人のきょうだい』（君島久子・訳、岩波書店、一九六九年）には鮮やかな黄色と、赤羽末吉が描く中国を舞台にした物語には、くっきりとした鮮やかな色が使われることが多い。では、日本の物語はどう描かれているのだろうか。赤に限って言えば、『ゆきむすめ』（今江祥智・文、偕成社、一九八一年）の愛情を示す一本の細いたすきの赤とか、『つるにようぼう』（矢川澄子・再話、福音館書店、一九七九年）の健気さを表現する消え入りそうな元結の赤など、あわあわとした赤が魅力的に使われている。『だいくとおにろく』（松居直・再話、福音館書店、月間「こどものとも」七五号、福音館書店、一九六二年、一九六七年単行本刊行）でも、鬼や橋として赤を多用しているが、大和絵風の絵の一部として、赤にも柔らかさが感じられる。しかし、同じ日本の物語でも、『ほうまんの池のカッパ』（椋鳩十・文、BL出版、一九九八年）や『黄金りゅうと天女』（代田昇・文、BL出版、一九九八年）のように、種子島や沖縄を舞台にした昔話には、南国の、ハレーションを起こすような光を表現するためにくっきりと明るい赤や弾けるような青緑色が使われているのだ。

赤羽末吉の色

赤羽末吉が、満州時代に書き記した次のような文章を読むと、日本の物語でも、地方の違いによって、または、日本の物語と中国の物語によって色を使い分けたことについて、その思いが見えてくる。

満洲の建築と云ふても範圍が廣く、全般にわたつて云ふ可くもないが、城内大通りの一つ二つを拾つてみやう。その様式も面白いが、その思ひ切つた色に先づ驚き魅せられる。と云ふても中間色になれた日本人の云ひ分で、満人に云はせれば至極あたりまえなのかも知れない。

飯館（めしや）等に、餘す處なく一色で赤、白、又は緑青、桃色等をベツタリ塗りつぶしたのがあるが、それが異様どころか、直に美しいのが不思議の様である。この不思議は日本で考へても見當のつく問題ではないが、結局氣候その他の周圍の條件がかくもどぎつい原色を美しく見せるのであると思ふ。」（出典 不明）

この文章にあるように、自らの体験から、氣候風土や文化の在り方によって、同じ色でも見え方、感じ方が違ってくるということを赤羽末吉は知っていた。だからこそ、赤羽が考える、湿潤でしっとりとした、自然と共存しているような日本の風土の中で生まれた日本の昔話や物語には同じ赤でも柔らかい赤を、反面、中国の広大な大地、乾燥していつも土ぼこりが立ち、地平線に巨大な夕日が沈んでいくような地を舞台にした物語には鮮明な、くっきりとした赤を使用したのである。

赤羽末吉は、子どもを楽しませたい、子どもの心を解き放ち、豊かに育むことができればと願いつつ絵本を描いていた。そしてまた、自らの戦争体験から、絵本によって子どもたちに日本文化の美しさや伝統を伝え、同時に、他国の人びとの文化を知ってもらうことが大切だとも考えていた。子どもたちが、幼い頃からお互いの文化を理解しあうことは平和につながると信じていたからだ。そのためには、それぞれの国の自然や文化をより正確に、よりわかりやすく子どもたちに伝えたいと、最大限の努力をし、心を砕き、絵本を描いた。特に、旧満州で暮らし、強く感じていた大陸と日本の風土の違いを、絵本の中の、草木、空、土、そして、服装、建築物などの色彩によっても感じてほしい、その色合いから、そこに漂う空気、そこに住む人々の暮らしや考え方などをも感じ取ってもらいたいと、描く絵の一色、一色をとことん選び抜いたのである。赤羽末吉は「絵はどれだけおそく線を引くかということなのだ」と言っていたが、絵本に描かれた一本の線とともに、その類いまれな幅広い経験と緻密な考察によって選び抜かれた一色は、読者の子どもたちの心に多くを語りかけ、灯をともし続けることだろう。（静岡市美術館 2020、赤羽末吉原画展図録より）